

高校二年生が読んだ「こころ」

九野里 信 夫

一、連載小説の読者として読む

「Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだらうと言うのです。私はおおかた叔母さんのところだらうと答えました。Kはその叔母さんはなんだとまきまします。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました：」

高校二年の生徒たちは、連載小説を途中から読むという方法で、夏目漱石の「こころ」を読んでいった。教科書は使わず、連載小説の途中からの部分をプリントにして渡された生徒たち。前後のストーリーはまったくわからず、「私」や「K」がどういう人物であるかもまったくわからない状況で、生徒たちは「こころ」を読んでいた。

生徒たちからは当然のように、多くの疑問が出され、不自然なところが指摘される。

「K」という名前。なぜ人物名を「K」というイニシャルで表現しているのか。なぜきちんとした人物名で表現されていないのか。また、「K」だけに限らず、他の人物の名前も固有名詞でてこない。「奥さん」と「お嬢さん」、「私」、「K」は同じ家に住んでいるようだが、一体四人はどういう関係なのか。「K」の「愛の告白」が、なぜ「自白」という表現になっているのか。「私」は「K」に対して、どんな感情を持っているのか……等々。連載小説として一九一四年に「朝日新聞」に登場した「こころ」。一九九八年の生徒たちにとって、「こころ」の中の「先生と遺書」の部分は、多くの謎に満ちている。その謎をひとつひとつクラスで読み解きながら、授業を進めて行つた。

二、一時間の授業（五月十四日）の実際

三十六人のクラス。生徒は普通座席。座席を中心に九班に分かれている。

(Tは教師のことば、Sは生徒のことばを示す)

T…これから「ころ」という小説の、ある部分が載せられているプリントを配ります。話の前後は切られています。プリントを先生がはじめに一度読み、その後君らにも声を出して一度読んでもらいます。読み終わったら、全員このプリントは机の中にしまってください。そして、もう一枚のプリントを配ります。これは小説の中の大事な言葉だけを取り出して、わざわざ空欄にしたものです。その二十五個の空欄を各班ごとに完成させてもらいます。決して、机の中のプリントは見ないようにして…。

生徒たちは、「エーツ、マジツ」と言いながら、配られようとするプリントを待っている。集中して読まないで、まづそうだな、という顔つきや、前後のストーリーがわからない一枚のプリントにかえって「オモシロソウダ」という興味を示した生徒も多い。

教師の範読の後、一文ずつを、指名した生徒に読ませる。班の順番を指名のめやすにしながら、のべ四十六人の生徒を指名して読ませていった。他者の読みを聞いていないと、いつ自分が指名されるかわからないので、生徒たちは他の生徒の読みにも集中している。目、耳、口をつかいながら本文を感じ取ることを求めている。範読と指名読みで授業の三分

(の「の」の時間が経過している。)

T…では、「空欄プリント」を、教卓の所に取りに来て下さい。班全員が、空欄を埋められた所を一位とします。

各班の生徒が教卓の所にプリントを取りに来る。すぐにやって来る班、ゆっくりとやって来る班、ジャンケンをした後、取りに来る班など、班によって対応はちがう。

T…では、十分間で空欄を、どれくらい埋められるか。本文の言葉を、どのくらい頭にいれられていたかを見せてもらいたいと思います。

二十五個の言葉は、おおよそ三つの内容に分かれている。「お嬢さん」の「嬢」や、「細君」、「下女」などの登場人物にかかわる言葉(漢字)。「自白」、「切ない」、「恐ろしい塊」など、人物形象にかかわる言葉。「注視」、「予覚」、「分別」、「念」など、現代ではあまり使われない言葉や、作者独自の言葉づかいなど。

時間が経つにしたがつて、「穴埋め作業」への取り組みがヒートアップし出す。机をくつつけて相談したり、表と裏のページを誰と誰がやるかを分担したりしながら。やがて、五班から声がかかる。

S1…先生、できた。はよ見に来て。

S2…おまえ、ここ、まだ埋まってへんぞ、はよ書け。

五班につづいて、一班、七班、六班から教師を呼ぶ声が。顔を寄せ合い、プリントを見せ合い、声をかけ合い、ワイワイ言いながら教師を呼び合う遊びの雰囲気が生徒の表情をなごませ、あるいは必死にさせ、話を普段しない隣の生徒ともしゃべらせてしまう。

一位班、二位班、三位班というように「遊びの要素をもった共同作業」のはやさの評価をし、「さあ、今度どの班が最高点か」と言いながら、二十五個の語句の答え合わせにはいつて行く。

「他者採点、自分のプリントを、前後左右の誰かに見てもらって、マルつけをしよう」と言いながら、プリントを交換できない生徒をフォローし、黒板をつかって一語、一語たしかめて行く。他者の採点には、どの生徒も厳しい。マルつけされている自分のプリントを横目で見ながら、「なんで、これがベケやねん」、「ウワツツ、キツツ」と言い合いながらマルつけが進んで行く。生徒は返された自分のプリントに目をつけている。教師は最高点の班を評価しながら、全体の状況をたしかめる。「遊びの要素をもった共同作業」で評価の高い班は、作品形象を読む時の相談や、発言もゆたかなことが

多い。逆に低い班は、相談ができなかったり、文字や読み取りの学習に課題をかかえる生徒がいることも多く、教師の個別指導が必要となってくる。今後、どの班、どの生徒に時間をかけてかわり合う必要があるかも、この作業から見えてくることが多い。語句の確認の後、「時」と「場」の読解にうつって行く。

T…では、机の中から小説のプリントを出して下さい。この中から、「時」をあらわしている言葉を見つけてほしい。まず、時代がいつかをあらわす言葉は？

S3…「軍人」。(生徒の発言は、板書して行く)

T…「軍人」か、なるほど。で、いつの時代や、S3。

S3…江戸時代ぐらいまでは、「軍人」という言葉は、あまりつかわなかったやろうから江戸より後。明治やと思う。

T…なるほど、なるほど。「軍人」以外に、ないかな。

S4…「下女」。今どきこんな言葉つかわへんし、やつば、明治やと思う。

T…二つの証拠が出て来たね。ところで、「軍人」という言葉は、いつから後にはつかわへんようになったか、わかるかな。

S5…戦争より前まで。

T…S5、戦争で、いつの戦争？

S5…第二次世界大戦。これより後には、(日本には軍隊がなくなつたはずやから)「軍人」という言葉は、つかわなくなった。

T…なるほど。この作品に描かれている時代は、だいたい、明治から昭和二十年ぐらいまでと言うことがわかるね。それ以上、細かく読むことは、ちょっとこれだけでは無理やね。

S6…先生。(S6が手をあげている。)

T…まだあるのか。

S6…「K」。人物の名前を、「K」というアルファベットで呼ぶようなことは、江戸時代まではなかったと思う。(説明中心の授業では眠ってしまうことの多いS6の発言は、教室内の視線を集める)

T…なるほど。S6は、なかなか気づかへんところに目をつけた。江戸時代やったら、自分の回りの人物を、「K」と呼ぶ可能性は低いね。この小説の時代は、「K」という一文字からも読み取れるんやね。時代は、おおよそ限定できてきたけど、では何月ごろの話やとわかる？

S7…「年始」という言葉から、一月。

S8…「女の年始はたいてい十五日過ぎだのに、なぜそんなに早く出かけたのだろう。」と書いているから、一月の十五日まで。

T…そうやね。S8の言う「そんなに早く」から、正月の、一月七日までの冬休みぐらいの期間かもしれんね。では、この小説の舞台となってる場所となってる場所はどこやろ？ 場所をあらわす言葉は、あるかな？

このあたりに来ると、二年生になって小説を初めて

(「学習する生徒たちも慣れて来て、何人もの生徒が挙手し出す。)

S9…「市ヶ谷」。

T…そのとおり。で、「市ヶ谷」って、どこにあるの？

S10…東京。

T…そうやね。「市ヶ谷」へ、「奥さん」と「お嬢さん」は行つたのだし、「市ヶ谷」という地名だけで(「東京の市ヶ谷」と言うことをせずに)「K」と「私」がわかり合えるのだから、「K」と「私」と「奥さん」と「お嬢さん」は、市ヶ谷の近く——東京府の中——にいたことがわかるね。

それでは、今日の最後。このプリントの中には、「私」と「K」と「奥さん」と「お嬢さん」、「下女」の五人が出て来るが、どんな関係の人たちだと思う？ みんな同じ家にいるみたいだけど、どんな関係やろ？ まず、「K」と「私」は？

S11…友人、親友みたいに見える。

T…なんでや？

S11…「恋」を相手に打ちあけたりしてるし。

T…そやな。で、「奥さん」と「お嬢さん」はどういう関係、S12。

S12…親子。

T…そやね。では、友人の「K」と「私」が、親子である「奥さん」と「お嬢さん」と一緒に住んでるのはなんでや？ そして「下女」がいるのはどういうことやろ？ (生徒は無言となり、考えこんでいる)

T…それでは、この五人はどういう関係やる。五人の関係について、ノートに記してもらいたい。

生徒たちは、残り五分ぐらいの間、本文、黒板、ノートなどを見直し、班で相談しながら、ノートに五人の関係を記して行った。

三、人物関係を読む授業（五月十六日）

前回の授業時、生徒たちは五人の関係を次のように推測した。S13は、「Kと私は、奥さんの所の寺の坊主をしていて、泊りこんでいた」、S14は、「Kと私は奥さんの夫の弟子として住みこんでいる」、S15は、「Kと私は軍人で、Kと私の大将か兄貴のような（上司のような）人物が奥さんの夫である」。多くの生徒たちはS15のように「Kはその叔母さんなんだとたまきます。私はやはり軍人の細君だろうと教えてやりました」という部分の「やはり」を手がかりにしながら、「奥さん」もまた「軍人の細君」であることを読み取る。しかし、作品の前後を示されていないので、「私」と「K」が、何故「奥さん」や「お嬢さん」と同居しているのかは予測しづらい。学生を多くかかえる京都の町に住む生徒たちも、学生下宿が減り学生アパートが増えている状況の中では、この人物たちの関係はつかみにくい。しかし、S16は、「Kと私は奥さんの家もしくは旅館に下宿していた。下女は奥さんに仕えている者」、S17は、「二人は下宿か、いそろうをしている学生」とノ

トに記した。

生徒達の予測は、「K」と「私」が、「奥さん」と「お嬢さん」の行く先や親戚関係に関心をもっていること、「K」も「私」も「お嬢さん」に恋心をいだいていること、この四人が同居していることを根拠にしている。四人の関係のアウトラインを、生徒たちの記したノートを印刷したプリントでたしかめながら、この日の授業はスタートした。

T…「私」と「K」とは、S16・S17が見抜いたように、「奥さん」と「お嬢さん」の家に下宿している大学生で、同級生でもある。二人が「友人」だということは、多くの人がノートに書いてくれたが、ではこの二人はどのような関係だったのだろうか？ 二人が、対等な関係だと思う人、手を挙げて。

（五分の一ぐらいの生徒が手を挙げる）

T…では、上下関係があったと思う人。

（三分の一ぐらいの手が挙がる）

T…では、作品の最初の八行の中から、二人が対等である証拠をさがしてほしい。

S15…「Kはく話を始めました」というように、「私」は「K」を呼び捨てにしているから。

T…そうやね。「私」の方も、「私はく答えました」と表現してあり、二人が対等らしいことが、ここからも読めるね。では、対等でないと思われるところは？ 先生が読んでいくから、

対等でないところに気付いたら、手を挙げて下さい。

本文の九行目から範読して行く。S6が四十九行目のところまで手を挙げる。

S6 …「いくらKでも」

T …どうして対等じゃないとわかるの？

S6 …「Kでも」は、「Kでさえも」という意味だから、「私」は「K」より自分が上だと見ていると思う。

S18 …「彼の告白」。ふつうは、「恋の告白」というのに、「告白」

という、ふつうにはつかわない言い方をしている。

T …「告白」って、どんな時につかう言葉？

S3 …警察で犯人を取り調べ時に、犯人にしゃべらせる時につかう言葉。だから「私」は、「K」を犯人のようなもの、下のものと考えていたと思う。

S8 …「(K)の告白は」重くてのろい」と書いている。特に「のろい」というのは良い表現ではない。「K」に対する「私」の評価が低い。見下しているように見える。

S10 …「口のあたりをもぐもぐさせる癖」。「もぐもぐ」は、人を馬鹿にした意味をもつ言い方や。

S11 …初めのほうのところの、「私は(Kに)教えてやりました」。「私」の方が「K」よりもよく知っていて、上から下に「教えてやる」という意味があるから。

T …では逆に、「私」よりも「K」の方が上だと、「私」が思っているところはないか？

S19 …六十行目。「時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念がきざし始めたのです」というところで、「K」の方が「私」よりも「強い」と書いてあるから。(生徒発言の部分は、クラス全員が線を引くことになっている)

T …では、結局、「K」と「私」はどんな関係だったのか？そのことについてノートにまとめていってもらいたい。

生徒は、自分の読みや考えをノートに記して行く。授業時の問答を手がかりにして次のようなノートがあらわれて来た。

四、生徒のノートより

△S7のノート▽

▽いつもは対等だと思っているが、お嬢さんのことになると自分の方がKより上だと思っている。私の方が先に下宿していた。(Kがあとに下宿してきた)。

▽対等である証拠——「Kは話を始めました」、「言うのです」、「答えました」、「私は」

▽対等じゃない証拠——「いくらKでも」、「教えてやりました」、「告白」、「のろい」

△S4のノート▽

▼下宿していたら、自分がその主人に好かれているかどうかということで、大きく自分のポジションに関係するだろう。「私」は主人に好かれている。だから主人のことについてもよく知っている。だから「K」に尋ねられている。「私」は「K」を見下している感じがある。「K」の立場が、「元来無口な男でした」というところからわかる。

△S12のノート▽

▼「私」の方がKより早く下宿しはじめたので、ここにいる期間も長く、奥さんとお嬢さんについても良く知っているので、自分の方が上だと思っている。

△S9のノート▽

▼「K」は世間のことや「お嬢さん」のことをあまり知らないの
で、よく知っている「私」の方が強いとしている。「やはり」とか
いって、自分がいかにもくわしく知っているように描いてい
て、見下したようにいって、自分が「お嬢さん」達と親密な
関係があるようで、「K」に少しはなくても何もあぶなげない
ように（初めは）感じている。「私」の方がよく知っているこ
とから、「K」は後に下宿してきた後輩みたいなもの。

△S1のノート▽

▼「K」から見ると、「私」とは対等か、もしくは自分が下。自
分の方が力関係が上なのになの奴に赤裸々な恋の話なんかする
はずがない。「私」は「K」が自分より弱いと思っていた。だ

から「自白」、「のろい」という言葉をつかっていた。そして「K」
が自分より強いと感じた時に、力関係の逆転という恐怖の念が
きざし始めた。しかし、力関係というのも普通の力関係とちが
い、兄弟的な力関係だと思われる。だから向い合わせに席を占
めて食事をとったりしている。

△S2のノート▽

▼「私」は「K」が恋をした事を知ただけで驚いている。つま
り「私」は「K」を恋なんかすべきではない人間と思っている。
つまり「K」は何らかの障害（恋をする上での）を持った人間
だと思っている。

△S20のノート▽

▼「教えてやりました」、「自白」、「のろい」、「いくらKでも」な
どから、「私」は「K」を見下している。または下として見て
いることが分かる。その一方、「ふつうの人よりも倍の強い力
がありました」の常人よりもすばらしい一つの才能を持ってい
ると認めていることや、「相手は自分より強いのだという恐怖
の念がきざし始めた」から、「K」をおそれている。つまり「K」
が上だとも思っているかもしれない。

五、部分から全体を読む

生徒たちは、一枚のプリントから、全体につながる読解を見せ
始めた。大正三年四月二十日から八月十一日まで、百十回にわた

って連載された「こころ」。そのほぼ一回分にあたるプリントから、生徒たちは「私」と「K」の関係を読み解き始めた。「私」が「K」より先に「奥さん」と「お嬢さん」の家に下宿していたことを読み取り、この下宿先のかかわりの上では、「私」の方が「K」よりも力関係が上であることも読み取った。

さらに、人間相互のかかわり合いや世間の事理については、「K」よりも「私」の方が長けているという「私」の自負心や優越感を読み取り、その一方で、「K」の「強さ」について「恐怖の念」を「私」が持っていることも読んでいった。

「私」が先に下宿していた「奥さん」の家に、下宿料を「私」がはらう形で「K」を住まわせる。「K」を下宿させることにについて「奥さん」は、「そんな人を連れて来るのは、私のために悪いからよせと言」う。その「奥さん」を説き伏せて「K」を保護するように下宿させる「私」。しかし、「K」の生活空間は、「私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上がつて私のいるところへ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならないのだから、実用の点から見ると、しごく不便な部屋でした。私はここに（Kを入れたのです）」と、書かれたような部屋であった。

貧窮の生活と神経衰弱の状況を持つ「K」への同情と庇護。その背景にある「K」への友情と優越感。その一方で「私」は「K」に対して深い羨望と劣等感を持っていた。「Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。そ

の上持って生まれた頭の質が私よりもずっとよかったです。中学でも高等学校でも、Kのほうが常に上位を占めていました。私には平生からなにをしてもKに及ばないという自覚があつたくらいですし、どこかにしつかりした男らしいところのある点も、私よりも優越に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私はむろんKの敵ではないと自覚していました。」

「私」は「K」に対して、対等な友人としてお互いを認めあう友情を感じつつも、その一方で激しい競争意識を燃やしつづける。「私」の側からは、競争的な関係（それは勝敗や上下関係を基軸にした関係であり）にもとづく視線が、いつも「K」に対して浴びせられつづける。「私」の競争主義的な視線は、「お嬢さん」に対する「恋の競争」で最も激しくなり、「K」を出しぬく形で「お嬢さん」を獲得する原動力となつて行く。しかも、「K」が自殺をした直後でさえ、「私」は「K」の遺書を読みながら、「私はちよつと眼を通してだけで、まず助かったと思いました。（もとより世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）」、「私はわざとそれをみんなの眼に着くように、元のとおりの机の上に置きました」、「それでも私は、ついに私を忘れることができませんでした」という状況を脱け出すことはできない。「K」への競争主義的な視線の背景には、勝者としての自分を守りぬくという意識が内在している。

「先生と遺書」全体を貫く「私」の視点、「私」と「K」との

関係を、生徒たちは一枚のプリントから読み解き始めた。連載小説の一回分には、当然のことながら、作品全体に深くつながるディテールが描かれている。一回分として掲載される紙面から、小説全体を予測し、読みぬいて行けるような工夫が細部にほどこされている。

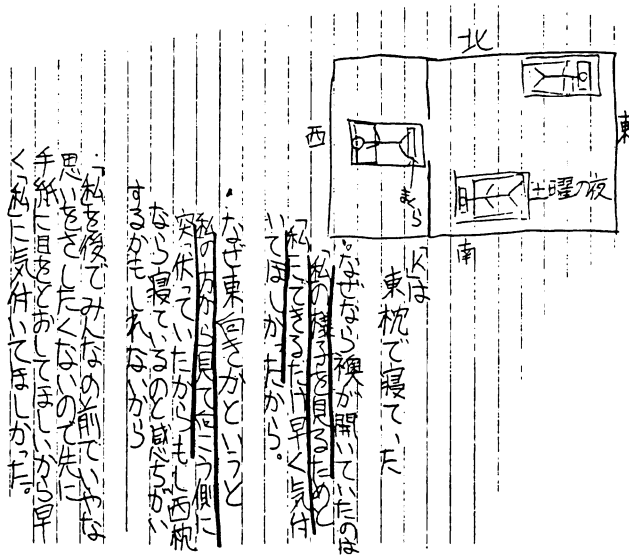
生徒たちは、「K」と「私」にひき寄せられながら、「先生と遺書」を読み進めていった。

六、「K」の死の様子

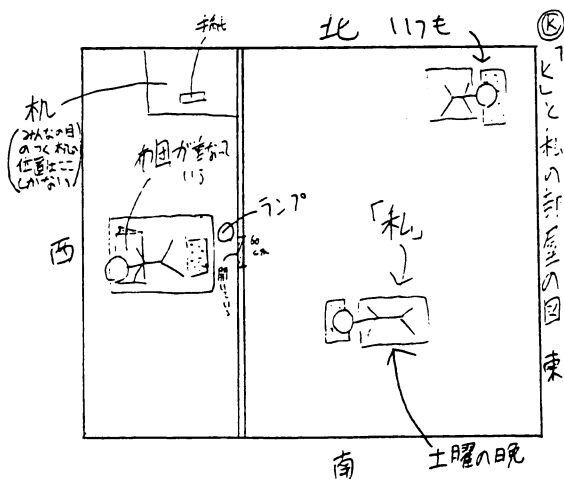
生徒たちの最大の疑問のひとつは、「K」の自殺であった。「K」が何故自殺したのか、どんな様子で自殺したのか？ 生徒たちは「K」の死の様子をノートに描くかたちで追求して行った。（資料a）

「私が進むうかよそうかと考えて、ともかく明るる日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、「K」は自殺してしまったのです」、「いつもは東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かもしれません。私は、枕元から吹き込む寒い風で、ふと目を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています」、「私は暗示を受けた人のように、床の上にひじを突いて起き上がりながら、きつとKの室をのぞきました。ランプが暗くともっているのです。それで床も敷い

【資料a】

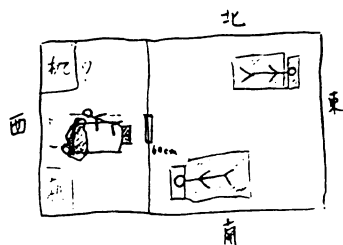


高校二年生が読んだ「こころ」



理由

22の「く自身は向三ノ向きに衣伏
 していまひて」で「これから」か
 西のちに向いてゐるが、
 24の「く裸にほとほと」で「血潮
 を初めて見た」で「
 仕切りの裸が三ノ間へ」
 に「さうしてその間へ」掛け布
 用や木の様子かわかる。そこで
 上の園の位置は、さうにラッパ
 は敷居察にいけば部屋を見
 回れる位置にあるから、上
 園のラッパ



「そうしてが逆接に聞いよ、私の部屋から見て向こう向きなりで西向きに倒れてゐるが、「そうしてふん」はその逆の東向きだと思ふ」

襖にほじほじ、てゐる血潮

東向きのふくに座つて普通顔は西向きになり、西を向いて首をゆるると、後ろに血が飛び散り襟にぬかる。そしてそのまゝ西の方に倒れた。

であるのです。しかし、掛け布団はね返されたようにすその方に重なり合っているのです。そうして、K自身は向こうむきに突っ伏しているのです。「私は、おい、と言って声をかけました。しかしなんの答えもありません。おい、どうかしたのか、と私はまたKを呼びました。それでもKの体はちつとも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を暗いランプの光で見回してみました。「もう取り返しがつかない」という黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に、私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。そうして私は、がたがたふるえだしたのです。「私はふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました」、「そうして振り返って、襖にほとばしっている血潮を始めて見たのです」。

これらの文章を手がかりにして、生徒たちは、「K」が「私」の部屋との間の襖を二尺（約六十センチメートル）ほど開けながら、その襖に血潮をかけるようにして頸動脈を切って死んでいったこと、「私」と自殺した「K」との距離がかなり近かったこと、「私」自身にも「K」の血潮が吹りかかった可能性があること、「K」の枕と「私」の枕もかなり接近していた可能性があることを読み取っていった。

七、「K」の死の意味するもの

——「K」が襖を二尺開けて死んだ理由は——

「K」は、「お嬢さん」や「奥さん」に自分の死体を見せたくないという配慮から、「私」に死体を最初に発見してもらいたかった。そのためにわざわざ襖をあけ、枕も「私」の方に近付けて自殺したのではないか、という読みを何人かの生徒が提出してきた。その一方で、(E)のように、「もしかすると魂の開放という宗教上の意味で、外に出れるために開けていたのかもしれない」という読みも出て来た。しかし、多くの生徒は、次に記すように、「K」の「私」への友情や、信頼、メッセージが、「二尺に開かれた襖」や「枕」、「血潮」にこめられていると読み取っている。

▼(A)：「K」は死ぬことに対して（少し）さびしさがあつたのだと思う。だから襖を二尺も開けておくことによつて、私に自分のさびしさを理解してほしかったのだと思う。

▼(B)：この日に限つて「私」は東枕で寝ていたので、襖を開けたら、冷たい風が直接あたつて、目を覚ましやすうと考えて襖をあけて、自殺したことをまず「私」に知ってもらいたいと思つていたから。

▼(C)：「K」は「私」に裏切られたことで、とても「孤独」になつていたために、せめて死ぬときは、少しでも「私」の近くで死にたかつたためと、一番はやく「私」に気付いてほしかったため。

▼(D)：自殺したということを早く「私」に知ってもらいたかった。また、机の位置から見て、自殺したとき血潮が「私」の部

屋へ入るようにして、最後まで一人ではなく、一番の友達に見守られながら死にたかったから。

- ▼(E)・・「K」は「私」に気付いてもらい、この事を一生焼き付けてやろうといううらみの念があったから、わざとすぐに気付くように開けていたと思う。もしかすると魂の開放という宗教上の意味で外に出るために開けといたのかもしれない。

- ▼(F)・・「K」は、親友も失い、恋人も失い、その結果、自らの向上心まで失い、カナリ孤独だったから死んだのだと思う。だから、死ぬ時くらいは、この場合「私」だったが、誰でもいいからそばにいてほしかったのだと思う。

- ▼(G)・・「K」は最期に「私」と話しかったのではないか。だが、「私」はもう寝ていたので、誰よりもはやく「私」に気付いてほしかったので襖を二尺開けて自殺した。

- ▼(H)・・「K」は東枕で布団をひいていた。襖を二尺あけていたのだが、二尺は「K」の肩幅と同じ長さで、「私」との友情を閉ざしてしまうのではなく開いたまま死にたかったから。

- ▼(I)・・「K」にとつて「私」というのは、すごく大事な友達だったと思う。襖を開けたのも、できるだけ「私」との距離感を近くに、そして最後の覚悟を「私」にだけは寝ながらも見ていてほしかったんだと思う。

- ▼(J)・・一人で死ぬのは孤独だから、寂しいからということ。そし

て襖を開けることによって、「私」がいることによって、その孤独感をとり、なおかつ「私」にだけ早く気がついてほしかったため。

- ▼(K)・・「K」は小さい頃からの親友である「私」に一番早く気付いてほしかったのだと思う。理由は「K」の枕の位置はいつも東側なのに今日に限って西側になっていたことから、「私」に対するわびの意味を込めたと思う。

孤独感につつまれながら、友情を死の間際まで求め続ける「K」。その切ない思いが二尺空いた襖の間にあらわれてみると読み取った生徒たち。「自分のさびしさを理解してほしかった」、「せめて死ぬときぐらい一人ではなく、一番の友達に見守られながら死にたかった」と、「K」の思いを彼らは読み取っている。死を目前にした「K」の思いは文中に表現されてはいないが、「K」のその思いを代弁するかのように、死を目前にした後年の「私」は次のように語っている。「私は死ぬまえにたつた一人でもいいから、ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたつた一人になれますか。なつてくれますか。」

また、生徒(D)は、「血潮が私の部屋へ入るようにして、最期ぐらい一人ではなく、一番の友達に見守られながら死にたかった」と述べ、生徒(G)も、「K」は最期に私と話しかかったのではないかと述べている。「K」とは自分の存在を「私」に焼きつけるように、語りつぐようにして、「血潮」を浴びせかけていった。

この生徒たちの読みを裏づける「K」自身の言葉はない。しかし、「私」自身が遺書の中で述べる次の言葉は、生徒たちの読みの確かさを一定裏づけていると言えるのではないか。「私は今自分で自分の心臓を破っているのです。私の鼓動がとまった時、あなたの胸に新しい命が宿ることができる満足です」。

「血潮」を「私」の顔に浴びせかけるようにして死んでいった「K」。「K」は「私」に血を浴びせかけることで、自分という存在を「私」にひきついではしかった。その思いは、後年の「私」にひきつがれ、「先生の遺書」という形に結集して行く。一枚のプリントの読解からスタートした生徒たちは、「K」の死の意味を読み深める段階にまで進んできた。

（くのり・のおお 東山高校教諭）